

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XVI) 1—

茂木秀淳

[2 2 1 章] (続き)(=D.228 章、8374-8428, K.235 章)

- (61) 子供たちの² 食べ物³、子供たちが見ている前で自分たちで食べ、そして、すべての使用人の前で食事をした⁴のである、このダーナヴァたちは。
- (62) (彼らダーナヴァたちは、) 乳飯、豆飯⁵、肉、パンやケーキを自分のために料理させ、自分のためだけに肉を (vr̥hāmāmsāni) 食べたのである。
- (63) (人々は) 皆、日の出まで寝ており⁶、早朝を夜としていた (寝ていた) のである⁷。どこの家でも毎日 (divārātram) 喧嘩が起こった。
- (64) 卑しき人々は、高貴な人が座っていると、そこに尊敬をもって近づくことはなかった。生活期を実践している人々と、悪しき行為をなす人とは、互いに相手を憎んだ。(種性の) 混合⁸が生じ、(種性の) 浄化 (śauca) は生じなかった。
- (65) ヴェーダに通じた賢者と、明らかに通じていない者とは、尊敬と軽蔑において、正しく区別されることはなかった⁹。
- (66) 戯れの姿や飾った姿をして動いたり止まったりするのを経験しようとする(?)¹⁰、下女たちは、悪しき人々の行なった行為 (vidhi) を行なった。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XV)—』(信州大学教育学部研究紀要第 99 号 2000 年 3 月) に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿から用いるものは以下のとおりである。

- K.: Sriman Mahābhārata, According to Southern Recension Based on the South Indian Texts With Footnotes and Readings, Sri Garib Dass Oriental Series No.72, First Published: Kumbhakonam 1906-1910.
- Hopkins[1903]: E. W. Hopkins, *Epic Chronology*, JAOS. vol.24, pp.7-56, 1903.
- Frauwallner[1925]: E. Frauwallner, *Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die nicht-sāṃkhyaistische Texte*, JAOS 45, 1925 pp.51-67. (Kleine Shchriften, pp.38-54)
- Frauwallner[1953]: *Geschichte der indischen Philosophie*, Bd.I, Salzburg, 1953.
- Hacker[1961]: P. Hacker, *The Sāṃkhyisation of the Emanation Doctrine Shown in a Critical Analysis of Texts*, WZKSO 5, 1961 pp.75-112. (Kleine Schriften, pp.167-204)

²bālānām Cp. bālānām ity anādare ṣaṣṭhī

³P. bhakṣān D., K.: bhakṣyam

⁴P. sarvaṃ paryaśnanti D., K.: sarvaṃ asaṃtarpya

⁵kṣaram Ca. kṣaram tilamiśraṃ bhaktam Cs. kṣa[sa]raṃ tilaṇḍulamiśraṃ śaṣkupavānam

⁶utsūryaśāyin Apte: one who sleeps even at sunrise cf. utsūryam; cf. Atharva Veda Saṃhitā 4.5.7

⁷prageniśāh Cs. prageniśāh prātaḥkāle niśikryaṃ kṛtavantaḥ

⁸saṃkara 「種性の混合」(varṇasaṃkara) については、山崎元一「ヴァルナ間混血の理論について」国学院雑誌第 86 巻第 5 号昭和 60 年 5 月 pp.24-50(『「インド古代社会の研究」刀水書房 1986 年第 11 章 pp.379-412 に収録) において詳述されている。

⁹nirantaraviśeṣāh Cs. nirantaraviśeṣāh vedavidāṃ vedavidāṃ bahumānāvamāne ca bhedarahitaprakārā ity arthaḥ

¹⁰P. hāvam ābharaṇaṃ veṣaṃ gatiṃ sthitiṃ avekṣitam D. hāram (K. bhāvam) ābharaṇaṃ veṣaṃ gataṃ sthitaṃ avekṣitam この句は P. では 66ab、D. では 67cd にあたり、前後の関連が異なる。すなわち、P. は次の 66cd と関連させて、D. では先行する 67ab (=P.65cd 「尊敬と軽蔑において、正しく区別されることはなかった」) と関連させて理解されている。

- (67) 女たちは男の姿をし、男たちは女の姿をして、戯れ、性愛、気晴らしに最高の歓楽を得たのである。
- (68) 裕福な人々によって、かつては、資格ある人々に遺産が¹¹与えられていたが、(今や)信仰なく (nāstikyād) 振る舞う人々は、(遺産相続の) 資格があっても¹²、(遺産に) 近づくことはなかった (?)¹³。
- (69) 友人に乞われた友人は¹⁴、利益が疑わしいところでは¹⁵、しつぽの先端の量の自分の利益のために、彼の財産を損なったのである (?)。
- (70) (彼らは、) 他人の財産を取ることを願い、商いに従事することはなかった¹⁶。またシュードラたちが、苦行を積み、高貴な種姓の中にいるのも見られた。
- (71) ある人々は、誓約なしに (ヴェーダを) 学び、他の人々は、偽りの誓約をして (ヴェーダを学んだ)。弟子は師匠に従順でなく、師匠の中には弟子を友人とする者もいた。
- (72) 父も母も、祭りを終えたかのごとく消耗し、年老いて力なき状態になると (aprabhutvau sthitau)、子供たちに食べ物を求めた。
- (73) そこでは、ヴェーダを知り、深さにおいて海のごとき英知をもつ者たちは、農耕などに従事し、愚かな人々は祖先祭の供物を (śrāddha) 食べたのである¹⁷。
- (74) 師匠たちは、毎朝、弟子によって使いに出され¹⁸、健康を尋ねること、(髭剃りなどの) 仕事¹⁹、指示の履行を、弟子の代わりに (? tasmin) 行なったのである。
- (75) 年若い嫁は、舅と姑の面前で、召し使いたちに命令し、また、夫を呼びつけては非難し²⁰、命令したのである。
- (76) 父は、努力してでも息子の機嫌をとった (araksac cittam)。 (財産を) 分与しても²¹、それでも (子供は) 怒るので²²、(家族は?) 困難な状態を過ごした²³。
- (77) 火災によって、泥棒によって、あるいは王によって、財産が奪われるのを見て、友人として尊敬される人々さえも、憎しみのために (財産を失った人を) あざけり笑った。
- (78) 彼らは、感謝することなく、信仰なく、罪深く、師匠の妻と接触し、食べてはならないものを食べるのを喜びとし、抑制なく、活力を失っていた (hatatviṣaḥ)。
- (79) 時が経つうちに²⁴、これを始めとする振る舞いを行なっている彼らダーナヴァのところに、住むまい、と私は考えたのである、神の王よ。
- (80) このように自分からやってきた私を喜ぶべし、シャチーの夫よ。汝が私を礼拝すれば、神の主よ、神々は私を敬うであらう。

¹¹dāyān arhebhyaḥ Deussen: [geistigen] Erbschaften

¹²sambhaveṣv api Ca. sambhaveṣv api sati vittādau nirvāhayogye 'pi Cp. sambhaveṣu samyagaiṣvareṣu vartanto vartamānā api

¹³nābhyavartanta Ca. (reading nātyavartanta) nātyavartanta pūrvajadattānāc chidya jagruḥ

¹⁴P, D.: mītram K. dravyam

¹⁵P. arthe saṁśayite D. arthasaṁśayite K. arthī saṁśrayate

¹⁶P. vipaṇyavyavahāriṇaḥ D., K.: vipaṇavyavahāriṇaḥ Cs. vipaṇyaṁ pratiśiddhaṁ lavaṇapakvānnādi vikriyayiṇaḥ Cs. は vipaṇya の説明をしているが、この語はアテストされていないので、vipaṇyavyavahāriṇaḥ と解した。

¹⁷「祖先祭の供物を食べる」ことの意味について、Ganguli は次のように説明している。'No merit attaches to the act of feeding an illiterate person.' (Ganguli: vol.9. p.149, fn.1)

¹⁸P. śiṣyānaprahītās tasmīn akuruvan guravaś ca ha D. śiṣyān aprahītās teṣām akuruvan guravaḥ svayam K. śiṣyān aprahītās teṣām akuruvan guravaś ca ha

¹⁹supraśnaṁ kalpanaṁ Ca. supraśnaṁ, sukhā rātrir bhavatām iti Ca. kalpanam keśarasādhanādi

²⁰P. samāhūyābhijalpatī D., K.: samāhvāyābhijalpati

²¹P. vyabhajamś D., K.: vyabhajac

²²saṁrambhād Cp. (saṁsāraṁ) pāṭhāntare saṁrambhāt krodhāt Cs. saṁrambhāt putrasyāparādhāt

²³P. tathāvasan D., K.: tathāvasat

²⁴viparyaye 「誤って (振舞う)」の意味か。 Deussen: im Umlauf der Zeit Ganguli: In consequence of ... the reversal of their former nature (p.149) 中村 [1997] 「以前と反対になって (=考えを変えて)」 (p.582 注 80)

- (81) 私を好み、私を優れたものとし、私を信頼し、私が八番目となる²⁵、七人の女神は、私のために (? me) 八通りに²⁶、私がいるところに住むことを願っている。
- (82) それら(女神と)は、希望、信仰、堅固、美、勝利、謙遜、忍耐であり、八番目である行儀が、これらの先頭に來るのである、パーカを教化する者よ。
- (83) 彼女たちと私は、アスラを捨てて、汝の国にやってきた。内面でダルマに専心する (dharmaniṣṭāntārātmasu) 三十の神々の中に我々は住むであろう。

ビーシュマは言った。

- (84) このような言葉を語った女神を、三界の聖仙たるナーラダとヴリトラを殺したヴァーサヴァの二人は、きわめて丁重に²⁷礼拝した。
- (85) すると、好ましい香りを持ち、膚に心地よい、あらゆる感官に安樂をもたらす、火の友である風が、神々の住居に吹いたのである。
- (86) 三十の神々ほとんどは、清浄な礼拝された場所に²⁸住んでいたが、ラクシュミーに伴われて座っているインドラを見ようと願った。
- (87) それから、千の目を持つ神の雄牛(インドラ)は、シュリー、友人、神々の間に住む聖仙に²⁹伴われて天界に達し、栗毛の馬の引く馬車に乗って、歓迎されつつ神々の住居を訪ねたのである。
- (88) その時、神に知られた勇猛をもつナーラダは、金剛を持つ者そして女神シュリーの意図を (ingitam) 心で吟味しつつ、そこ (ナーラダのところ) への榮あるめでたき訪問を、シュリーに対して讃えた。
- (89) すると、天は輝き、自存する祖先の住居に甘露を雨降らせた。太鼓は打たないのに響き、そして、静まった方位は輝いたのである。
- (90) ヴァーサバは、季節通りに、穀物に雨降らせ、何者もダルマの道から逸れなかった。多くの宝の山を飾りとする大地には、天界を住居とする者たちの勝利に、妙なる音が響いた³⁰。
- (91) 人々は、祭式を喜びとし、輝き、善行を為す者たちの道に住して、清浄となった。人間と不死の神々、そしてキンナラ、ヤクシャ、ラークシャサたちは、大いに繁榮し、安樂に過ごし、輝いたのである。
- (92) 時に非ざれば、実はもちろんのこと、花は決して木から落ちることはなかった。たとえ風によって揺るがされても。牛は、乳を出し、願望をかなえた (kāmadugha)。粗野な言葉は誰からも出ることはなかった。
- (93) インドラを先頭にしてあらゆる願望をかなえる神々(の崇拜)と共に、シュリーへのこの崇拜を、集会で語り、繁榮を願う賢者たちは、幸運(シュリー)を得るのである。
- (94) クル族の勝れた者よ、汝によって尋ねられた、幸運と不幸についての (bhavābhavasya) すぐれた事例がここに語られた。今や汝は、私が語ったこのすべてを吟味して、真実に至るべし。

[2 2 2 章] (=D.229 章、8329-8453, K.236 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) いかなる性向を持ち、いかなる振舞いをなし、いかなる知識を持ち、何を目的とする者が³¹、プラクリティ³²よりも高く永遠なるブラフマンの境地に達するのか³³。(cf.MBh.XII.269.1)

²⁵P. mayāṣṭamyō D.,K.: jayāṣṭamyō

²⁶P. me 'ṣṭadhā D.,K.: te 'ṣṭadhā me は「私も含めて」の意味か。D.,K. の読み (te) の方が分かりやすい。

²⁷P. devīm atyarthaṃ D.,K.: devīm prītyarthaṃ

²⁸P. cābhyarcite D. vābhyarthite K. cābhyarthite

²⁹P. suraṣiṇā D. devarṣiṇā K. maharṣiṇā

³⁰sughoṣaghoṣā Ca. sughoṣaghoṣāḥ śobhanagirādīnām ghoṣo yeṣu gokuleṣu sā sughoṣaghoṣā

³¹P. kimparāyanah D.,K.: kimparākramah

³²prakṛti Ganguli: Prakṛiti, here, of course used in its largest sense. (p.151, fn.1)

³³この詩節の ab 句が広く流布していたことについては、J. Brough, The Gāndhāri Dhammapada, London Oriental Series vol.7, pp.175.282 参照。p.175 には Sutta-Nipāta 324 との類似が指摘されている。

ビーシュマは言った

- (2) 解脱の教えに専心し、軽い食事を取り、感官を制御した者が、ブラクリティよりも高く永遠なるブラフマンの境地に達するのである。
- (3) ここでも人はこの古譚を語る。ジャイギーシャビヤ仙とアシタ仙との対話を、バーラタよ。
- (4) 偉大な英知をもち、諸々のダルマの伝承を伝えられ³⁴、怒りも喜びも離れたジャイギーシャビヤ仙にアシタ・デーヴァラ仙は言った。
- (5) 汝は、称賛されても喜ばず、非難されても怒ることはない。汝にはいかなる英知があり、それはどこから生じたのか。そしてその英知の(最終的な)目的は何なのか。
- (6) このように言われて、大きな熱力をもつジャイギーシャビヤ仙は彼アシタ仙に、疑いの余地のない、すぐれた意味をもつ語からなる清浄にして偉大な言葉を語った。
- (7) 善行をなす人々の最高の帰趨、最高の境地³⁵、寂靜、それら汝が私に尋ねたことを、私は汝に語るとしよう、再生族よ³⁶。
- (8) 非難する人々に対しても称賛する人々に対しても常に等しく³⁷、デーヴァラよ、義務(? samaya)や善行を(行なったことを)隠す人々は³⁸、
- (9) (隠したことを)言われたとしても、(隠したことの、あるいは他人の?)不利を喜ぶ話し手に³⁹話すことを望まない⁴⁰。彼ら賢明な人々は、危害を加える者に対して危害を加えることを望まないのである。
- (10) 彼らは、得られなかったものを嘆くことはなく、時にかなったことを (prāptakālāni) 行なうのである。去った物事を悲しむことはなく、またそれらを思い出すこともないのである⁴¹。
- (11) 力をもち誓約を為した彼らは、デーヴァラよ、(目の前に) やって来た崇められるべき人々の⁴²もろもろの事柄に関しては (? artheṣu)、すすんで (kāmād) 適切に行為するのである。
- (12) 学問が熟し、偉大な英知をもち、怒りを抑え、感官を制御せる彼らは、心によっても、行為によっても、言葉によっても、だれも攻撃しないのである。
- (13) 嫉妬なき彼らは、決して互いを傷つけることはない。そして、堅固な心をもつので、他人の繁栄によって苦しむことはない。
- (14) 彼らは、他人の非難と称賛とを度を過ぎて語ることはなく、(彼らに対する)非難と称賛によって態度を変えることは決してないのである。
- (15) 完全に心静まり、あらゆる生き物の幸福に喜ぶ者たちは、怒らず、喜ばず、誰に対しても攻撃することはしないのである。(彼らは)心の結び目を解いて、楽しく (yathāsukham) 歩むのである。
- (16) 彼らには友人⁴³はなく、彼らは他の人々の友人でもない。彼らにとって敵はなく、彼らは誰にとっても敵ではない。

³⁴ dharmāṇām āgatāgamam Ca., Cp.: āgatāgamam, āgato jñātaḥ āgamo jñāpakam vedādīḥ

³⁵ P., K.: niṣṭhā D. kāṣṭhā

³⁶ P., K.: yan mām pṛcchasi vai dvija D. mahatīm ṛṣisattama

³⁷ P. samo D., K.: samā samo と単数にした場合、cd 句との関連はどうなるのか。cd 句の主語、動詞とも複数形 (ye, nihnavanti(D., K. は nihnavanti)。

³⁸ P. ye D., K.: yat

³⁹ P. vaktāram ahite ratam D., K.: vaktāram ahite hitam

⁴⁰ P. vivakṣanti D. vadiṣyanti ab 句の意味がはっきりしない。それは次のようである (異説は注 38, 39)。

uktāś ca na vivakṣanti vaktāram ahite ratam /

Deussen: welche angedet dem Redenden auf Unfreundliches nicht Unfreundliches erwidern werden
中村 [1998] 「また、話の内容が話し手に有利であっても、[他に] 不利な場合には、それを口にしないし、」

⁴¹ P., K.: na cainān pratijānate D. na caiva pratijānate pratijānate; Moniel: to remember sorrowfully.

⁴² P., K.: samprāptānām ca pūjyānām D. pūjyāṃ ca samprāptāyām ca

⁴³ bāndhavāḥ Deussen: Anhang Ganguli: friend

- (17) このように振る舞う人々は (martyāh) 常に安楽に生きる。ダルマを知る人々は、ダルマにのみ従うのである、再生族のすぐれた者よ。この道から逸れる者たちが、喜びもし、また恐れもするのである。
- (18) その道に住したる私は、どうして誰かに不満を言うことがあろう。非難され、あるいは称賛されても、どうして喜ぶことがあろうか。
- (19) 人々は、それぞれ望む道を行くのである⁴⁴。非難されても称賛されても、私は委縮も増長もしないであろう。
- (20) 真理を知る者は、軽侮を甘露のごとく喜ぶべし。賢者は、尊敬を毒のごとく常に恐れるべし。(cf. Manu 2.162)
- (21) 軽侮された者は、この世でもあの世でも両方とも、安楽に住し、あらゆる罪から解放される。侮辱する者が束縛されるのである。(cf. Manu 2.163)
- (22) 最高の境地を求める賢明な人々は誰でも、この誓約に依存して、安楽を得るのである。
- (23) 感官を制御した者は、あらゆる願望 (kratu) を完全に滅した後、プラクリティより高い永遠なるブラフマンの境地に達するのである。
- (24) 神々も、ガンダルヴァも、ピシャーチャも、ラークシャサも、この最高の境地に達した者の足元 (padam) にも昇り着くことはないのである⁴⁵。

[2 2 3 章] (=D.230 章、8454-8477, K.237 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) すべての世間にとって好ましく、あらゆる生き物を喜ばせ、あらゆる徳性を具えた人は、一体この地上にいるのであろうか。

ビーシュマは言った。

- (2) ここで私は、質問する汝に、バラタ族の雄牛よ、ナーラダについて語ったウグラセーナとケーシャヴァの対話を語るとしよう。

ウグラセーナは言った。

- (3) 見よ、世間はナーラダは称賛に値すると考えている。彼は徳性を具えていると私は思う。かく尋ねる私に彼について語るべし。

ヴァースデーヴァは言った。

- (4) ククラ族の王よ、私が思うナーラダのすぐれたもろもろの徳性を、簡潔に語る私から聞くべし、人の王よ。
- (5) 彼の行為の源泉は、身体を滅ぼす自我意識にあるのではなく、聖典の知識と行為との不分離にある。それ故あらゆるところで尊敬されるのである⁴⁶。
- (6) 熱力をもつ⁴⁷ナーラダは、実に自分の言葉に違反することがない。欲望からか、あるいはまた食欲からにせよ (言葉に反することがない)。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (7) (彼は、)大我の規定の真実を知り⁴⁸、忍耐強く、力強く⁴⁹、感官を制御し、正直にして真実を語る者である。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。

⁴⁴P. tan mārgam abhigacchanti D. tat tasmād api gacchantu K. tat tasmād adhigacchanti

⁴⁵K. はこの後に 34 詩節を付加し、この章を 60 詩節からなるものになっている。

⁴⁶この後に D.,K. は次の詩節を挿入している。

aratiḥ krodhacāparye bhayaṃ naitāni nārade /
adīrghasūtrah sūras ca tasmāt sarvatra pūjitaḥ //

⁴⁷P. tapasvī D.,K.: upāsyo

⁴⁸adhyātmavidhitattvajña 同様の表現は次の箇所に見られる。

adhyātmagatitattvajñaṃ (MBh.XII.38.12) adhyātmagatiniścayam (MBh.XII.291.9) adhyātmagatiniścayāḥ (MBh.XII.306.43)

⁴⁹śakto Cs. śakto madhuravāk /

- (8) 威光によって、名誉によって、認識によって、知識によって、規律によって、誕生によって、苦行によって、彼は優れている (vrddha)。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (9) 彼は、安楽を性格としてもち、よき楽しみをもち、よき食事をし⁵⁰、注意深く清浄にして、よき言葉をもち、そして嫉妬心がない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (10) まさしく彼は慈悲を行なう。罪は彼には存在しない。彼は他の人々を財産の故に好むことはない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (11) 彼は、ヴェーダの朗唱と物語りとによって生計を得んと願っている⁵¹。そして、辛抱強く、軽べつすることはしない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (12) (彼にとってはすべて) 等しい故に、好ましい者もなく、好ましからぬ者もない。彼は心地よく語る者でもある。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (13) 彼は多聞にして明らかに語り、学識あり、怠惰でなく、偽りなく、高貴な心をもち、怒ることもなく、食欲でもない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (14) 財産においても、ダルマにおいても⁵²、愛欲においても、彼はかつて争ったことは⁵³ない。彼のもろもろの欠点は完全に断ち切られている (samucchinās)。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (15) 彼は、確固とした信仰をもち、非難されざる自己をもち、ヴェーダに通じ、穏和にして、迷妄と欠点を離れている。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (16) 彼は、あらゆる願望に執着せず、自己に (のみ) 執着しているかのように見える⁵⁴。彼は長く疑うことなく、弁舌に長じている。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (17) 彼は自惚れの対象に⁵⁵心をつなぎ止めること (samādhi) はしない。また決して自分を称賛しない。嫉妬なく、確固とした言葉を持っている⁵⁶。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (18) 彼は、世間の種々の振る舞いを、その根本についてさえ⁵⁷侮辱することはなく、(人との) 交わりの知識に通じている⁵⁸。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (19) 彼は、いかなる伝承にも喜ばざることなく、自分の苦行を生活の糧にせず (?), 不毛な時を過ごすことなく⁵⁹、従順な性格をしている。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (20) 彼は、努力を為し、英知を完成し、瞑想に (samādhitas) 満足することはなく、抑制に住し、醜聞することはしない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (21) 彼は、恥を知り、注意深く、他人の幸福のためによく時を過ごし⁶⁰、他人の秘密に入り込む者ではない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。
- (22) 彼は、財産を得ても喜ばず、得られなくとも悲しむことはない。揺るぎなき認識をもち (sthīrabuddhir)、自己に執着することはない。それ故あらゆるところで尊敬されるのである。

⁵⁰P. sukhaśīlah susambhogaḥ subhojyaḥ D.,K.: suśīlah sukhasaṃveśaḥ subhojaḥ

⁵¹P. arthān abhijigīṣate D.,K.: arthān abhijigīṣati Cp. abhijigīṣati tīraś cikīṣati / Deussen: sucht er seinen Unterhalt zu gewinnen Ganguli: He always seeks to conquer all earthly desires. 「ヴェーダの朗唱との価値が財産を凌ぐことを願っている」か。

⁵²nārthe na dharme D.,K.: nārthe dhane vā Ca. (nārthe dhane) arthapadaṃ prajoyanaparaṃ, dhane ceti pṛthag-upādānāt /

⁵³vigrahaḥ Ca. vighrahaḥ viśiṣṭo grahaḥ

⁵⁴saktātmeva ca lakṣyate Ca. śaktātmeva (lakṣyate)

⁵⁵P. mānārthe D.,K.: kāmārthe

⁵⁶P. dṛdhasambhāṣas D.,K.: mṛdusaṃvādas

⁵⁷P. vṛttaṃ prakṛteś cāpy D.,K.: cittaṃ prekṣate cāpy

⁵⁸samsargavidyā Ca. samsargavidyā gītādividyā, tatra hi samsrjyante prāyo janāḥ / Cs. prānavidyākuśalaḥ, sarveśām anupraveśakuśalo vā /

⁵⁹avandhyakālah Cs. avandhyakālah sadā kalyāṅakārī

⁶⁰P. suneyaḥ D.,K.: niyuktaḥ suneyaḥの MBh.XII の用例はこのみ。

- (23) あらゆる徳性を具え、勤勉清浄にして、落胆することなく、時を知り、よき行為を知るこの者に、誰が好意をもたないことがあろうか。

[2 2 4 章⁶¹](=D.231 章 (8478-8509), 232 章 (8510-8554), K.238 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) あらゆる生き物の最初と最後を⁶²私は聞きたい、クル族の長よ。禅定、祭式、時、そしてそれぞれのユガにおける寿命について (聞きたい)。
- (2) 世間の真実と生き物の去来とを余すところなく (聞きたい)。そして創造と帰滅は⁶³どこからこのように生じるのか。
- (3) もしあなたの心 (buddhi) がここで我々に対して好意的であるならば、善き人の中ですぐれた者よ、このように私があなたに尋ねたことを、私に語るべし。
- (4) かつてブリグに対して語られた聖仙バラドヴァージャのすぐれた話を聞いた後、私にはすぐれた認識 (buddhir uttamā) が、
- (5) この上なく徳ある、神聖な境地に住する⁶⁴認識が生じたのである。それ故もう一度私は尋ねる。汝はそれを語るべし。

ビーシュマは言った。

- (6) 私は、ここで汝に、質問する息子に対して尊者ヴィヤーサが語った古譚を語ろう。
- (7) ヴェーダの支分とウパニシャッドと共にすべてのヴェーダを理解した後、ダルマの完全さを見て、最終的な行為を望みつつ、
- (8) ヴィヤーサの息子⁶⁵シュカは、ダルマの意味の疑問を断ち切ったクリシュナドゥヴァイパーヤナ・ヴィヤーサに次の疑問を尋ねた。
- (9) 生き物の群 (bhūtagrāma) の創造者、時の知識に関する定説⁶⁶、そしてバラモンのなすべきことを、汝は語るべし。
- (10) このように尋ねる息子に対して、過去と未来を知り、一切を知り、一切のダルマを知る父は、そのすべてを語った。
- (11) 無始無終にして、未生の、神聖な、老いることなき、永遠にして不動の⁶⁷、(その存在を) 推量もできず認識もできないブラフマンが最初に存在していた⁶⁸。(cf.Manu 1.5)

⁶¹ 224章から247章まで「シュカの問い」(Śukānupraśna)と呼ばれる章が続く。Frauwallnerは224-225章(Bombay版231-233章)に見られる時間の単位、世界紀の記述や自然観察に基づく創造説、植物靈魂観、jīva説などをとりあげ、これらの章は、サーンキヤ説の影響を受けていない古い層に属することを論じている。(cf.Frauwallner[1953] pp.113-124; Frauwallner[1929]) また、Paul Hackerは、224章の創造説を詳細に分析し、Manu Smṛti、KīrfeleのPurañā PañcalakṣaṇaのText Groupとの比較検討を行なっている。(cf.Hacker[1961])

⁶² ādyantam Cn. Cp.: ādim saṃsārahetum (Cp. kartāram), antam layasthānam (Cp. antasthānam, yadvā bhūtānām ādir antas ca yasmāt tam upādānakāraṇam ity arthaḥ)

⁶³ sargaś ca nidhanaṃ caiva sargaṃ ca nidhanaṃ caiva という読みもあり (D7, T, G3,6, M5-7)、この読みの方がここまで「聞きたい」(śrotum icchāmi)の目的語となり、理解しやすい。P.では、「創造と帰滅」だけが、pravartateの主語になる。

⁶⁴ divyasamsthānasamsthītā Cn. alaukikasvarūpaniḡhāvati Cs. divyarūpā

⁶⁵ vaiyāsakiḥ Ca. vyāsa eva vyāsakaḥ, saṃjñāyām kan / tasya apatyam vaiyāsakiḥ Cp. vyāsasyāpatyam vaiyāsakiḥ

⁶⁶ P. kālajñāne ca niścayam D. kālajñānena niṣṭhitam K. kālajñāne ca niścitam

⁶⁷ P., D. ajaram dhruvam avyayam K. avyaktam ajaram dhruvam Hackerはavyaktamを後代のサーンキヤ説の影響であると考えている。(Hacker[1961] p.81 (Kleine Schriften, p.173))

⁶⁸ P. samavartata D., K.: sampravartate Hackerは、これ以降の詩節の動詞が現在形であることなどによって、sampravartateをoriginalと取っている。sampravartateの意味(「活動する」「存在する」など)については、Hacker[1961] p.82.fn.4(Kleine Schriften, p.174)に詳述されている。

- (12) 15の瞬間 (nimeṣā) が一秒 (kāṣṭhā) であり、30の秒を一分 (kalā) と計算すべし。30の分と一分の10番目の部分⁶⁹とが一時間 (muhūrta) となるであろう⁷⁰。(cf.Manu 1.64, Hopkins[1903] p.12)
- (13) 30の時間が一昼夜であるというのが聖人たちによって計算された数である。(cf.Hopkins[1903] p.19) 30の昼と夜とが一月であり、12ヵ月が一年であると言われる。一年として(太陽の)南北二つの進行を、数を知る人々は語るのである。(cf.Hopkins[1903] pp.19,43)
- (14) 太陽は、人間世界の⁷¹昼と夜とを分ける。夜は生き物の⁷²睡眠のためにあり、昼は行為の活動のためにある。(cf.Manu 1.65)
- (15) 祖霊の夜と昼は(人間の)一ヵ月である。それは、再び次の二つに分けられる。暗い(半月は)、(祖霊の)昼であり、行為の活動のためにある。明るい(半月は)⁷³、(祖霊の)夜であり、睡眠のためにある。(cf.Manu 1.66, Harivaṃśa 506)
- (16) 神々の夜と昼は(人間の)一年である⁷⁴。それは、再び次の二つに分けられる。そこでは(太陽が)北行する期間が昼で、南行するのが夜である。(cf.Manu 1.67)
- (17) 神々と世間の⁷⁵夜と昼はすでに述べられた。(これから)その両者の年の長さを (varṣāgram) 数えて、その後でブラフマンの昼と夜とを語ろう。
- (18) まずこれら、クリタ、トレーター、ドゥヴァーパラ、カリの各ユガ期における年の長さを、順に従って、語ろう。
- (19) (神々の)四千年、それがクリタ・ユガであると言われている。それには、同数の百年の薄明と同様の薄暮⁷⁶がある。(cf.Manu 1.69; Harivaṃśa 511))
- (20) その他の三ユガにおいては、薄明と薄暮を伴うが、千と百が一つづつ少なくなる⁷⁷。(cf.Manu 1.70)
- (21) これらが永久永遠の諸々の世界を (lokān) 維持しているのである。ブラフマンを知る人々は、あなた、永遠のブラフマンをこのように認識している。
- (22) クリタ・ユガにおいては、ダルマは四本足を具備している。真実も同様である。そこでは他の何物も不正によって獲得されることはない⁷⁸。(cf.Manu 1.81)
- (23) 他のユガにおいては、(不正による)獲得のために⁷⁹、ダルマは足一本づつ減少し、窃盗・虚偽・ごまかしによって⁸⁰不正が増大するのである。(cf.Manu 1.82)

⁶⁹bhāgaḥ Cn. bhāgaḥ bhagaḥ sūryas tatsambandhī kalāyā daśamoṃśaḥ, tena sahitaḥ triṃśatkalo muhūrtaḥ / sa ca sūryasya udayādudayāntaraparyantaṃ yāvān kālas tasya ṣoḍaśoṃśaḥ pādonanāḍīcatuṣṭayātmakāḥ / tasyāpi daśamāṃśaḥ sārhadhvaviṃśatipalātmakāḥ

⁷⁰K. は ab 句と cd 句の間に、22 に及ぶ詩節を挿入している

⁷¹mānuṣalaukike Cp. mānuṣalaukike mānuṣalokavyavahāre / anuṣatikatvād ubhayavṛddhiḥ / daivika iti pramādaḥ / daiva iti (st.17) vakṣyamāpatvāt (st.17 = st.16 in the Poona edition)

⁷²P, D.: bhūtānām K. saṃyāti

⁷³P. śuklaḥ D.,K.: kṛṣṇaḥ 夜と昼との関係に関して、Manu は P. と同じ理解を示している。

⁷⁴P.,D.: varṣaḥ K. hy abdaḥ

⁷⁵P.,K.: daivalaukike D. jīvalaukike

⁷⁶saṃdhyāṃśaś Cn. saṃdhyāṃśaḥ yugāntarāyor antaram Cs. saṃdhyāṃśaḥ yugāvasānakālaḥ

⁷⁷P.,K.: ekāpāyena saṃyānti D. ekapādena hīyante Manu: ekāpāyena vartante Cs. ekāpāyena ekasahasralopena

⁷⁸P.,D.: nādharmenāgamaḥ kaścit paras tasya pravartate K. nādharmenāgamaḥ kaścid yuge tasmin pravartate Manu: ... kaścin manuṣyān pravartate N. āgama upadeśavākyam sa ca para iti viśeṣaṇād veda eva Ganguli: No knowledge or object Deussen: keine Bereicherung 中村 [1998] 所得 N. tasya kṛtayugātmanah puruṣasya

⁷⁹āgamād Deussen: infolge der Bereicherung Ganguli: ordained in the Vedas あるいは「他のユガに至ると」の意味か。

⁸⁰P, Manu: caurikānṛtamāyābhīr D.,K.: cauryakānṛtamāyābhīr Cn. cauryam ca kānṛtam ca kutsitam anṛtam Cs. caurasya bhāvaś cauryakam N. māyā sāthyādirūpā

- (24) クリタ・ユガにおいては、人々は病なく、あらゆる目的が達成されており、四百年の寿命をもっている⁸¹。トレーター・ユガなどにおいては⁸²人々の寿命 (vayas) は四分の一づつ減少する。(cf.Manu S.1.83)
- (25) ヴェーダの言葉もユガに従って減少する、と我々に⁸³伝えられている。そしてまさにヴェーダの結果である寿命と願望も同様である。(cf.MBh(Bombay).XII.261[60],7cd, Manu 1.84)
- (26) クリタ・ユガにおける諸々のダルマは、トレーター・ユガやその後のドゥヴァーバラ・ユガにおけるものと異なっている。カリ・ユガにおけるダルマも異なっている。あたかも (それぞれのダルマは) 能力に従って作られたかのごとく⁸⁴である (=Manu 1.85c'd). (cf. MBh(Bombay).XII.261[60],8; Parāśarasamhitā 1.22)
- (27) クリタ・ユガにおいては苦行が最高 (のダルマ) であり、トレーター・ユガにおいては知識が最高である。ドゥヴァーバラ・ユガにおいては祭式が最高であり、カリ・ユガにおいては布施こそが⁸⁵最高である、と言われている。(cf.Manu 1.86; Parāśarasamhitā 1.23; Vāyu Purāṇa 8.64)
- (28) この (神々の) 一万二千年が一ユガと呼ばれると詩人たちは知っている。この一千回の繰り返しがブラフマンの昼と言われている。(cf.Manu 1.71cd,73ab; Harivaṃśa 515)
- (29) 同じ長さの夜とがブラフマンの一日である⁸⁶。その (昼の) 最初に一切を支配する者は (viśvam īśvaraḥ)、帰滅 (夜) の時には大我に⁸⁷入って眠り、夜の終わりに目覚めるのである。(cf.Manu 1.73c; Harivaṃśa 532)
- (30) ブラフマンの昼は千ユガを終わりとし、夜も千ユガを終わりとする、と昼と夜を知る人々は知っている。(cf.MBh.VI.30.7, Manu S.1.73ab, Hopkins[1903] p.43.)
- (31) 夜が終わる時目覚めたブラフマー神は不滅なものを変異させ⁸⁸、大存在⁸⁹を創造する。それから顕現を本質とする心 (manas) を (創造する)⁹⁰。(cf.Manu 1.74cd)
- (32) ブラフマンは熱き精液である⁹¹。この一切の世界はそれに属している。この唯一のものか

⁸¹ ab 句で意味がまとまらず、c 句の最初の語、すなわち「クリタ・ユガにおいては」(krte) までで一まとまりの意味となっている。

⁸² p. tretādiṣv eteṣāṃ D.,K.: tretāyuge tv eteṣāṃ

⁸³ p. hrasantūti ca naḥ D. hrasantūti ha naḥ K. hrasantūtiha naḥ

⁸⁴ p.,K.: dharmā yathāśaktikṛtā iva D. nṛṇāṃ yugahrāsanurūpataḥ

⁸⁵ p.,K.: dānam eva D., Manu: dānam ekaṃ (Manu 1.86d')

⁸⁶ p. rātris tāvat tīthī brāhmī D. rātrim etāvatīṃ caiva K. rātris tu tāvatī brāhmī

⁸⁷ p. 'dhyātman D. dhyānam K. 'tmānam

⁸⁸ praitibuddho vikurute brahmākṣayam 「人格的なブラフマー神 (男性名詞) が根源的物質 (akṣayam すなわちブラフマン中性名詞) を変異させて創造を行なう」という趣旨であろうか。しかし、以下の記述においては、brahmā と brahman の両者が明確に区別されているとも思えない。(cf.Hopkins[Great Epic] pp.141-42) Hacker は 31-35 詩節に混乱があると指摘し、31ab, および 32-34 詩節を後の挿入と見なしている。(cf.Hacker[1961] p.83 (Kleine Schriften, p.175) akṣayam の用例は MBh.XII ではここのみで、また Manu には vikurute brahmākṣayam はない。akṣayam のヴァリエントとして avyaktam があり (M1,6,7)、この方が、manas の vyaktātma という形容と対応しているが、後の改訂か。Frauwallner は、nichtsamkhyistischen Texte の創造説として、この詩節から第 33 詩節までを取り上げている。(cf.Frauwallner[1925],pp.51-52 (Kleine Schriften, pp.38-39))

⁸⁹ mahad bhūtam N. mahad bhūtam ahaṃkāraṃ sṛjate

⁹⁰ tasmād vyaktātmaṃ manaḥ P.,D.,K. ともこのように読んでいるが、Hacker はヴァリエント (K7,D4,9) から、vyaktāvyaktātmaṃ manaḥ という読みを取り上げ、これを採用すれば、第 33 詩節の内容と矛盾しなくなる論じている。(cf.Hacker[1961] p.85 (Kleine Schriften, p.177) D.231 章はここで終わり、次の詩節は 232 章の第 1 詩節となっている。K. は同一の章が継続している。

⁹¹ brahma tejomayaṃ śukraṃ Cn. brahma mahattatvam Cp. brahma vyāpakam Cs. brahma caitanyādhiḡhitam ajñānam

brahma の性質として類似の表現は、

pumān prajāpatīs tatra śukraṃ tejomayaṃ viduḥ // (MBh.XII.183.15)

brahma tejomayaṃ śukraṃ yasya sarvam idaṃ rasaḥ / (MBh.XII.232.9)

mama caiva prabhāvena brahma tejomayaḥ śuciḥ // (MBh.XII.320.34)

Hacker は jagat の異読 rasaḥ, rasaṃ に注目し、この語を original の読みと捉え、「ブラフマンは熱き精液であり、この世界はその放出である」という読みを提示している。(Hacker[1961] pp.86-87 (Kleine Schriften, pp.178-179))

ら⁹²動くものと動かぬものからなる第二のものが生じたのである。

- (33) 昼の始めに目覚めた(ブラフマー神は)、知識によって⁹³世界を創造した。最初に、顕現を本質とし素早く動く心 (manas) という大存在を⁹⁴(創造した)。
- (34) ここで(ブラフマー神は)、光をもつもの (=心) を支配しつつ⁹⁵、七種の⁹⁶精神的なものを創造した。遠くまで行き、また様々な方向に行き、願望と疑問を本質とする、(cf.MBh.XII.187.36ab)
- (35) 心 (manas) が、(ブラフマー神の) 創造の願望に突き動かされ、創造物に変異するのである⁹⁷。それ(心)から虚空が生じた。その特性は音声であるとされる⁹⁸。(cf.Manu 1.75)
- (36) 虚空が変異することによって、あらゆる香を運ぶ清浄にして力ある風が生じた。その特性は接触であるとされる⁹⁹。(cf.Manu 1.76)
- (37) また風の変異によって、暗闇を押し退け輝く¹⁰⁰光の元素が¹⁰¹そこに生じた。それは色を性質とするとされている。(cf.Manu 1.77)
- (38) また光の変異によって味を本性とする水が生じた。水から香りを性質とする地が(生じた)¹⁰²。これが最初の創造であると言われている¹⁰³。(cf.Manu 1.78)
- (39) 先に生じた元素の性質は¹⁰⁴それぞれ後の元素に達する。それらはそれぞれ、それぞれに先行する元素の性質をもつ¹⁰⁵と伝えられている。(cf.Manu 1.20)
- (40) 水の中に香りを知覚して、(水に) 香りがある、とある人々が言うならば、それは通達せぬ故である¹⁰⁶。それ(香)は、地のみにあると知るべきである。水と風とに依存するとしても¹⁰⁷。
- (41) これら七種のプルシャは¹⁰⁸、それぞれ様々な力をもっていたが、完全に集合することがなければ、生き物を創造することはできなかった。(cf.Manu 1.19a)
- (42) それらは、相互に依存しあって偉大なアートマンに¹⁰⁹至った後、身体という依り所に到達する故に、プルシャと言われるのである¹¹⁰。
- (43) 依り所であるから身体である¹¹¹。それは、形をもち十六のものを本性としている¹¹²。それ

⁹²P.,D.: ekasya bhūtam bhūtasya K. ekasya brahmabhūtasya Ca. ekasya bhūtam, ekasmā jātam Cs. (ekasya brahmabhūtasya) brahmabhūtasya brahmacaitanyādhiḥṭitasya

⁹³P.,K.: vidyayā D. vidyayā Ca. avidyayā guṇatrayamayā prakṛtīyādivācyayā Cn. avidyayety mahat-tatvasyāpi kāraṇam uktam / avidyā については Hopkins[Great Epic] p.141 参照。Hacker は、purāṇic Sāṃkhya や Vedānta 学派との関連から、avidyayā を取る。(cf.Hacker[1961] p.89 (Kleine Schriften, p.181))

⁹⁴P. mahābhūtam, D.,K.: mahad bhūtam この詩節では、mahābhūta と manas は同一のものとされていると理解できるが、そうすると、第 31 詩節の「大存在から心が創造される」という内容と矛盾が生じる。従って第 31 詩節の脚注のような Hacker の提案がなされることになる。(cf.Hacker[1961] p.88 (Kleine Schriften, p.180), Frauwallner[1953] p.121.) いずれにせよ、このあたりの記述には混乱があるようである。

⁹⁵abhībhūya Cp. abhibhūya, aidyayā saha ātmavaśam vidhāya; Cs. abhibhūya kṣobhayayitvā

⁹⁶sapta Ca. sapta buddhyahamkārapañcamahābhūtākhyān Cs. sapta mahadahaṅkārapañcatanmātrasaṃjñān

⁹⁷P.,D.: sṛṣṭīm vikurute K. sṛṣṭīm na kurute

⁹⁸P.,K.: śabda guṇo mataḥ D.,Manu: śabda(m) guṇaṃ viduḥ

⁹⁹P.,D.: sparśo guṇo mataḥ K. sparśaguṇaṃ viduḥ Manu: sparśaguṇo mataḥ

¹⁰⁰P.,D.: rociṣṇu K. rociṣṇur Manu: jyotir

¹⁰¹P.,K.: jyotirbhūtam tamonudam D. jyotir bhavati bhāsvaram Manu: virociṣṇu

¹⁰²P.,Manu: gandhaguṇā bhūmiḥ D. gandhas tathā bhūmiḥ K. gandhavahā bhūmiḥ

¹⁰³P. pūrvaiśā sṛṣṭir ucyate D. sarveśam sṛṣṭir ucyate K. pūrvēśam sṛṣṭir ucyate Manu: ity eśā sṛṣṭir āditāḥ (Manu は b 句も異なった読みを伝えている。

¹⁰⁴P.,K.: guṇāḥ pūrvasya pūrvasya D. sarvasya pūrvasya

¹⁰⁵P. yāvat titham(yāvathitham と読む。) yad yat tat tat tāvadguṇaṃ D. yāvad yathā yac ca tat tat tāvad guṇaṃ K. yāvad guṇaṃ yad yat tat tat tāvad guṇakaṃ Manu: (cd) yo yo yāvathithas caisaṃ sa sa tāvad guṇāḥ smṛtaḥ / ab 句も MBh とは異なる読みを伝えている。

¹⁰⁶anaipuṇāt N. anaipuṇādīti mūrkhāṇām evāyṃ pūrvapakṣo na viduśam kāṇādādīnām

¹⁰⁷P. āpo vāyuṃ ca saṃsṛitam quad D.,K.: apām vāyoś ca saṃsṛitam P. の āpo (nom. pl) は読みにくい。「そして水は風に依存して香をもつと知覚される」という意味か。

¹⁰⁸P. ete tu sapta puruṣā D.,K.: ete saptavidhātmāno 「七種のプルシャ」については、Hopkins[Great Epic] p.142 参照。

¹⁰⁹P. mahātmānam D.,K.: mahātmāno hy

¹¹⁰puruṣa ucyate Cs. putratvena śarīratvena śayitum śaktā iti puruṣāḥ

¹¹¹P. śrayaṇāc charīraṃ D. śarīraṃ śrayaṇād K. śrayaṇāc charīri

¹¹²śoḍaśātmakam Cn. śoḍaśa, pañca sthūlabhūtāni samanaskāny ekādaśendriyāni cf.Hopkins[Great Epic] p.169.

に¹¹³大きな諸元素は¹¹⁴機能と共に¹¹⁵入り込んだ。(cf.Manu 1.17cd; 18ab)

- (44) そして、あらゆる要素と共に¹¹⁶苦行を実践するために(生き物に入り込んだ(?))(cf.Hopkins[Great Epic] p.113.)。大きな元素を最初に創造した者、彼こそを人々は造物主と言った。
- (45) 彼こそが生き物を¹¹⁷創造したのである。彼こそが最高のプルシャである¹¹⁸。不生のブラフマー神(たる彼)は、神・聖仙・祖先・人間を創造したのである¹¹⁹。
- (46) 諸々の世界を、川を、海を、方位を、山を、木を、人・キンナラ・ラクシャを、鳥・家畜・野獣・蛇を、変化するものとししないものを¹²⁰、そして動くものと動かぬものの二種を(創造したのである)。
- (47) これらは、以前の創造において¹²¹果たした機能(karmāṇi)と同じ機能のみを、繰り返し創造されても果たすのである。(cf.Manu 1.28)
- (48) 有害と無害、穏和と無慈悲、正義と不正、真実と虚偽、(これらは以前の創造において)創造者が考えたもの¹²²である。その故に、彼(創造者)は、(この創造において)それを望むのである。(cf.Manu 1.29)
- (49) もろもろの大元素¹²³、感官の対象、形における多様さ、そして、(これらと)生き物との結合を¹²⁴規定するのは創造者のみである。
- (50) 行為を知るある人々は¹²⁵、(結合を規定するのは)人の行為である、と言った。他の賢者は、運命である¹²⁶と言い、元素を考察する人々は¹²⁷、自性である¹²⁸、と言った。(cf.MBh.XII.230.4)
- (51) 人間の行為と運命とは、結果・行為・自性によって(異なる?)。ある人々は、区別することなく¹²⁹、これら三種は別ではない¹³⁰(と言った)¹³¹。

¹¹³P. tad D.,K.: tam Cp. taṃ puruṣam / tad itī pāṭhe liṅgaśarīram / N. tad itīpāṭhe sthūlaśarīrāpekṣayā klībatvaṃ tad が指すはずの中性単数の語は、文脈からは「身体」以外にはないが、それで意味をなすか。

¹¹⁴bhūtāni mahānti Cn. bhūtāni sūkṣmāṇi, mahānti mahattattvāni bhuktāvīṣṭakarmasahitāni / bahutvaṃ pratīpuruṣaṃ mahadādīnām bhinnatvapratīpādanārtham /

¹¹⁵saha karmaṇā Deussen: mitsamt ihrer Funktion

¹¹⁶P. sarvabhūtāni cādāya D.,K.: sarvabhūtāny upādāya Cs. sarvabhūtāni caturviṃśatitattvāni / ādāya śarīratvena svīkṛtya

¹¹⁷bhūtāni bhūtātma という異説もある。(K7,D4,9)そこでは、bhūtātman は創造者の呼称として用いられていると理解される。

¹¹⁸P.,K.: sa eva puruṣaḥ paraḥ D. sthāvarāṇi carāṇi ca

¹¹⁹P.,K.: ajo janayate brahmā D. tataḥ sṛjati brahmā

¹²⁰avyayaṃ ca vyayaṃ caiva D. yāvat kalpāvasthāyī gaganādīkam avyayaṃ / vyayaṃ daṃśamaśakadi /

¹²¹prākṛṣṭyāṃ Ca. prākṛṣṭyāṃ prāgjanmani quad Cs. Prākṛṣṭyāṃ pūrvakalpe Cn. pratīkalpaṃ sṛṣṭivairūpye kṛtāhānākṛtābhyāgamau prasajyetām

¹²²P. ato yan manyate dhātā D.,K.: tadbhāvitāḥ prapadyante

¹²³mahābhūteṣu Cp. mahābhūteṣu mahābhūtākāryeṣu deheṣu

¹²⁴vinīyogaṃ Cn. vinīyogaṃ bhokṛbhogyabhāvena sambandham

¹²⁵P.,K.: karmavido janāḥ D. karmasu mānavāḥ D. の読みは、P. の XII.230.4b と同じである。

¹²⁶daivam cf.Hopkins[Great Epic] p.104.

¹²⁷bhūtācintakāḥ Cs. bhūtācintakāḥ lokāyatīkāḥ MBh.XII における bhūtācintakāḥ の用例は、以下の 2 例である。これらの用例から、bhūta の意味は「元素」と考えられる。

mahābhūtāni pañceti tāny āhur bhūtācintakāḥ // (MBh.XII.267.4cd)

pañcamāṃ sargaṃ ity āhur bhautīkaṃ bhūtācintakāḥ // (MBh.XII.298.20cd)

¹²⁸svabhāvaṃ Ca. na hi puruṣakāradaivaśasreṇāpi śīlāsv ankurarasavaḥ / tasmāt svabhāvo 'pi kāraṇaṃ pṛthak /

¹²⁹P.,D. navivekaṃ tu kecana K. avivekaḥ kathamcana MBh.XII.230.5 では avivekam. naviveka という語形については、Speijer, Sanskrit Syntax, 403 (p.317) 参照。

¹³⁰apṛthagbhūtā Cn. apṛthagbhūtā iti padacchedaḥ

¹³¹MBh.XII.230.5 にパラレルが見られる。それは次のようである。

puruṣaṃ karma daivaṃ ca phalavṛttsvabhāvataḥ /

trayaṃ etat pṛthag bhūtā avivekaṃ tu kecana // (MBh.XII.230.5)

- (52) ある存在がこのように世界を創造した、また、このよう(に創造したの)ではないと¹³²、行為に住する人々は(世界の原因を)様々に言い¹³³、真理に住する人々は(sattvasthā)、(世界の原因を)一つと見るのである(samadarsinah)。 (cf.MBh.XII.230.6)
- (53) 苦行は人々にとって最高のものである。その根本は自制と平静である。それ(苦行)によって、心(manas)によって願う望みの一切を獲得するのである(53cd=MBh.XII.230.9cd)。
- (54) (人は)苦行によって、世界を創造した存在を¹³⁴を獲得するのである(MBh.XII.230.10ab)。彼はその存在になり、一切の生き物の主となるのである。(cf.MBh.XII.230.10)
- (55) (以前の創造において)聖仙たちは苦行によって昼夜ヴェーダを学んだ¹³⁵。(その結果)無始無終の永遠の言葉が自存者によって創造されたのである¹³⁶。
- (56) (ブラフマンの)夜の終わりに¹³⁷生れた聖仙たちの名前、そして諸々のヴェーダにおける創造物¹³⁸、それらを彼は彼ら聖仙に与えたのである¹³⁹。
- (57) 名称の相違、苦行・行為・祭式と呼ばれるものは、世間における完成である¹⁴⁰。しかし、精神の完成は¹⁴¹、ヴェーダにおいて十段階に¹⁴²述べられている。
- (58) ヴェーダを知る者たちによってヴェーダの文章の中に語られた秘密は、その終わりにおいて¹⁴³、正しく順序に従って¹⁴⁴、記されている。(cf.MBh.12.230.11)
- (59) ヨーガに達しない者には¹⁴⁵、この行為より生じ、対立を含んだ別々の状態がある。しかし自己を完成した認識者は、たいていの(行為の)力を捨て去るのである¹⁴⁶。
- (60) 音声のブラフマンと最高のブラフマンという二種のブラフマンが認識されるべし。音声のブラフマンに習熟した者が最高のブラフマンを理解するのである。(cf.Maitrāyaṇī Up. 6.22, Hopkins [Great Epic] pp.45,90.fn.2, Haas[1922]No.676(p.37))

[224 章未完]

¹³²P. evam etac ca naivaṃ ca yad bhūtaṃ sṛjate jagat (K. daivaṃ instead of naivaṃ) D. etam eva ca naivaṃ ca na cobhenānubhena ca P. と D. は読みが全く異なるが、言っている内容は、「世界原因にはいろいろな説がある」という点で同じである。そうであるとすれば、D. の表現の方が整っていると見なし得る。

¹³³P. karmasthā viṣamaṃ brūyuh D.,K.: karmasthā viṣayaṃ brūyuh Ca. ye karmasthā aihikapārālukikakarmapradhānās te viṣamaṃ nānārūpaṃ jagatkāraṇaṃ ... prāhuḥ Cn. karmasthā ity ārhatānāṃ yaugikāṃ nāma / te hi karmāṣṭakavaśād eva jīvanāṃ bandhaḥ, taptasīlārohanādīnā nirjarākhyena ca dharmeṇa mokṣa iti vadanti

¹³⁴yad bhūtaṃ Cs. yad bhūtaṃ paramātmā

¹³⁵adhyaiṣanta Cn. adhyaiṣanta, prāgjanmany adhītān yogabaleṇaiva smṛtavantaḥ

¹³⁶utsrṣṭā Cs. utsrṣṭā smṛtvocāritā

¹³⁷P. śarvāryanteṣu D. nānārūpaṃ K. は nānārūpaṃ の代わりに nāma rūpaṃ ca という読みを伝えている。nāmarūpa に関しては、Hopkins[Great Epic] p.178.fn.2, Haas[1922] No.19(p.8) 参照 Cn. śarvāryante sargādau Cs. śarvāryanteṣu pūrvakalpeṣu

¹³⁸vedeṣu sṛṣṭayaḥ Cp. deveṣu devasargarūpāḥ / pāṭhāntare vedeṣu dṛṣṭayaḥ, vedaproktāni jñānāni

D. は ab 句の後に次の詩節を挿入している。

nānārūpaṃ ca bhūtānāṃ karmaṇāṃ ca pravartanam /

vedaābdebhya evādau nirmirñite sa īśvaraḥ /

nāmadheyāni carṣiṇāṃ yās ca vedeṣu sṛṣṭayaḥ //

¹³⁹P. tāny evaiḥyo dadāti saḥ D.,K.: anyebhyo vidadhāty aḥ

¹⁴⁰P. nāmabhedas tapaḥkarmayaḥjñākhyā D. nāmabhedatapaḥkarmayaḥjñākhyā N. bhedaḥ gārhasṭhyam iti yāvat

¹⁴¹ātmasiddhis Cn. ātmasiddhiḥ ātmano muktiḥ Cp. ātmasiddhiḥ śarīrādivailakṣaṇyenāvasthānam Cs. (reading -siddhaiḥ) ātmasiddhaiḥ vedeṣu siddhasvarupaiḥ

¹⁴²daśabhiḥ kramaiḥ Cp. daśabhiḥ kramaiḥ maṇḍalaiḥ

¹⁴³tadanteṣu Ca,n,p. anteṣu vedāntesu, upaniṣatsu Hopkins もこの語をウパニシャッドと捉えている。(Hopkins[Great Epic] p.93)

¹⁴⁴kramayogena Cn. kramayogena pūrvoktena nāmādidaśakena Cp. aṣṭācatvāriṃśat saṃskārāpādena Cs. saṃpradāyasambandhena

¹⁴⁵P. viyogināḥ D. 'pi dehināḥ K. hi dehināḥ Ca. viyogināḥ yogāprāptimataḥ

¹⁴⁶P. ātmasiddhis tu vijñātā jahāti prāyaśo balaṃ D. tam ātmasiddhir vijñānāj jahāti puruṣo balāt K. ātmasiddhis tu vijñānāj jahāti prāyaśo balaṃ Ca. ātmasiddhiḥ śarīrādivailakṣaṇyenāvasthānam / sā vijñātā satī balaṃ karmabalaṃ śabalitātmadarśanaphalaṃ jahāti tyajati / prāyograhānāt jīvanmuktāvasthāyāṃ bhoktavyaṃ karmaphalaṃ anujñānīte / bhāvīkarmaphalaṃ vilīyate, ūsara iva bijavapanam iti Cp. abalāt anirvācyāder ajñānāt

(2000年5月25日 受理)